
清二の夏

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清二の夏

【Nコード】

N4549E

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

小児癌に身体を蝕まれている野球少年清二は、自分のとって最後の試合に出たいと切に願った。しかし、首を縦に振らない監督。だが、清二は……

純潔を表す白に囲まれた病院の個室。窓からは日光が降り注いでいた。

窓のそばに配置してある小さいベッドに横たわる少年の名は清二。小学6年生。

頭髮は1本も無く、身体には太い点滴の管が巻かれていた。彼は野球部に所属している。

だが、それはもう過去の事になろうとしていた。一人ため息をつく。

その時、病室の扉が音を立てて開いた。立っていたのは中年の男。

男は清二の方へと近づいた。清二はベッドから半身を起こすと、その男に言った。

「お願いします、自分を、試合に出させて下さい」
深く頭を下げた。

だが、中年の男は首を縦に振らなかった。

「自分がどういう状態か分かっているのか、お前は小児癌にかかっている外に出て歩く事すら困難なんだぞ。そんなお前が試合に出たら病状が悪化するの間違いないだろ」

「それでも俺は試合に出たいんです」
彼はどうしても試合に出たかった。

小学1年生の時に野球チームに入り、その後ぐんぐん野球の才能が開花していった。

だが3年生の頃、体におかしなことが起こるようになった。練習の疲れが抜けない、全身がだるい、食べ物や喉を通らない。

医者に連れて行ってもらったなら、重度の小児癌と診断された。そして病魔はどんどん彼の体を蝕んだ。

薬の副作用で身体は痩せ衰え、頭髮は一本残らず抜け落ちた。

4年生からしか試合に出してもらえという決まりがある故、彼はただ一度も試合に出れなかった。

最後に一度でいいから試合に出たいということで、チームの監督と直談判したが

「ダメといったらだめだ」

その監督はブツブツ何かを言いながら、病室を早足で出て行った。扉を閉める音が、小さな病室に悲しく響いた。

中年の男が一人、冷房の効いた病院のエレベーターに乗っていた。エレベーターが二階から一階に通過する間、その男は目頭を抑えながら搾り出すような声で言った。

「すまん、本当はお前を試合に出したかったんだ、許してくれ」

“チン”という音と共に、エレベーターが一階に着いた。

昨日降っていた雨のせいでグラウンドの土は多少湿っていたが、今は晴天。絶好の試合日和である。

この日は二校の小学校の間で野球部の試合が行われるのだ。

試合前、ベンチに座っている一人の少年が呟く。

「清二の奴……応援くらい、来て欲しかったな」

ユニフォームの背中に印刷された春日丘マリーンズの文字が、微妙かに震えていた。

監督らしい中年の男が言った。

「宇根、試合始まるぞ」

「はい」

試合は春日丘マリーンズがリードしている状態で進んでいた。だが八回表、相手チームのエースが打席に立った。

『カーン』

球がバットに勢いよく飛ばされる音が響いた。

球は観客席に落ち、今打った相手チームエースと塁に立っていた二人がホームベースに走った。

形成は一気に逆転。一点の負い点を覆す事は出来ず、九回裏に突入した。

打席には宇根がいた。先ほどヒットを出した者が二塁に立っている。ここでホームランを打つことができれば逆転勝ちできる。

相手ピッチャーが投げた。宇根はバットを振るが、空を切った。

二球目、一直線に投げられたストレートが、宇根の腹に直撃した。思わずバッドを落として身を縮めた。

大丈夫か、とチームメイトが駆け寄る。

刹那

「俺が代わりに打ちます」

皆が振り向いた

そこには点滴台を持った清二がいた。

清二はよろよろと覚束ない足取りでバッターボックスに向かった。

監督が清二に対して言う。

「何をしてるんだお前は！」

「試合あるのに、ベッドでゆっくり出来るわけじゃないじゃないですか」

「今すぐ病院に戻れ」

「待つて、俺の代わりに清二に打たせて下さい」

宇根が言った。

「代打には他の者を用意するから、お前は黙ってる」

その時だった。

「俺からもお願いします」

「俺からも」

春日丘マリーンズのチームメイト全員が代打に清二を用いるよう監督に頼み込んだ。

これにはさすがの監督も折れた。

「わかった、清二、無理をするんじゃないぞ」

「はい！」

清二は点滴台を横に立て、バットを握った。

ピッチャーが投げた。ストレート。速い球ではないが、キャッチャーのグローブに入った。

二球目、またも空振り。次第に清二は焦った。

自分のために監督に頭を下げて頼み込んだチームメイトに報いる為、打たねばならない。

そして、これが自分にとって最後の試合となるかもしれないのだ。

清二は、自分の寿命が残り少ないのを知っていた。

先日、清二は自分の母親と医者が話しているのを偶然見かけた。

それに聞き耳をたてると、医者が言った。

「お子様は、もう長くはないかもしれません。もって二ヶ月が限界かと」

そこで、自分の母親がさめざめと泣いた。

清二も同じ気持ちだった。だが、そんなこと気付かないフリをして過ごした。

自分以後二ヶ月と思い出させたくなかったから。

清二は全てをこの試合にかけていた。ホームランを打ち、チームを勝利に導いてやると。

「来い！！」

相手ピッチャーは頷き、球を投げた。

先の二球とは速さが上がっていた。相手ピッチャーの心遣いなのだろうか。

だが、どちらでもよい。全てを球に集中させた。

余力を全て出し、バットを思い切り振った。

ボールはバットに当たった。だが、ぽとぽと落ちた。

しかし、相手はその球を拾いにいこうとしなかった。

代わりに、「ガンバレ！！」の声援。

味方からも同じ声援。

皆の声援を受け、清二は走った。

いや、正しく言うなら足を引きずりながら歩いた、のほろがいいかもしれない。

点滴台を杖のように使い、一塁を踏む。

途中転びそうになりながら二塁へ、三塁へ。二塁にいた者も、走るのを忘れたかのように清二に声援を送っていた。

あとはホームベースを踏むのみ。しかし、そこで清二は倒れた。朦朧とする意識の中、あるのは使命感だけ。

最後の力を振り絞って、清二は立ち上がった。

ホームベースまであと四メートル、三メートル、二メートル、一メートル。

清二は力尽き、倒れこんだ。

だが

右手が、ホームベースにのっていた。

味方から、相手チームから、歓喜の声があがった。

その声に紛れて審判。

「すみません、ファールです」

(後書き)

ほんとうにみんなねえ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4549e/>

清二の夏

2010年11月19日16時13分発行